

Zurich 留学記(1)

A. Roth 教授

□THE FELLOWSHIP HOME

玄関に並んでいるインターフォンのボタンのところで私は思い迷ってしまった。

アルフレッド・ロート先生一何か歴史的な人物に会いに来てしまったというようなおびえが、若年の、独語さえ心もとない私に幾重もの不安となって襲ってきた。大切な試験とかいうときに逃げ出したくなるようなことがよくある。その種のためらいを覚えた。

チューリッヒベルグの谷間に何のてらいもなく建っているフェロウシップホームを見つけた時、以前写真で見たことへのなつかしさがこみあげたものだった。私は赤いフォルクス・ワーゲンを手に入れたばかりで、10台くらいは止められる駐車場に停めて石段を登って玄関にたどりついた。1階—アトリエ、2階—住居、3階—アルフレッド・ロート。どのボタンを押せばよいのか。直接名前のところを押すことはできず、2階のボタンを押した。が、返事はなかった。少し待ったが、返事はなかった。

上の方からハローという声がした。私はロート先生の顔を知らないけれどとにかく階段を上がり彼と握手をして、室内に招き入れられた。しわだらけであるが大きく、そしてしっかりした握手であった。室内は広間であり整然としていた。私をソファーに座らせたロート先生は、早速お茶の用意を始めた。

□職探し

私は、チューリッヒ工科大学 (ETH) へ京都大学増田研究室からの交換留学生とし

て1972年にスイスに飛んだ。大学の授業をきくというよりはむしろ設計事務所というものを知りたかったので、初めはかつて増田研究室へ留学生として来たことのあるペーター・ギュラーの事務所に参加させてもらった。ギュラーは都市計画家で活躍していたが建築の設計はパートナーのダルバレイという人がいて、私は彼のもとで働いた。

ダルバレイは南西スイスのマルテニの町を本拠としてチューリッヒに週に何度かやってきては私と打ち合わせをして帰って行った。彼にドイツ語は不要であった。フランス語圏の人であり、会話は英語であった。3ヶ月ほどたって、私は彼とどうも気が合わないように感じて職場を失った。

日本でもしたことのない職探しを始めることにして、ETHの先生と何人か会い、また最もスイスで活躍していたエルンスト・ギーゼルの事務所を訪ねた。彼の事務所は古い一軒家であり、活気に満ちていたが、私は十分に自分を売り込むことができないまま、しばらく考えさせてほしいと言われて1ヶ月ほど待った。その間に彼は、新しく完成した自らの設計による事務所へ移転し、そこで再び会ったが、すぐ働かせてもらうことはできなかった (A&U '75年に特集されている)。私には2年間という期限があり、何もしないで待つということは許されなかったので留学生担当官のドクター・バドウ氏に相談して、ロート先生に会うことをすすめられた。そして約束を取り付けてもらった。

□アルフレッド・ロート先生

ロート先生はまず、何語で話すかを問い

かけてきた。スイス人は独・仏・英・伊語は自由に話す。私は英語を希望した。

私は自らの身分や状況を説明して私を使ってくれる事務所の紹介を頼んだ。ロート先生は、ドクター・バドウよりの連絡ですでに承知しており、2~3の建築家名をあげ、誰がよいかを尋ねた。私は当然少しも知識がないので、すべて任せるといって、彼は、ワルター・モーゼルがいいと言った。「彼はまだ若い、なかなか活躍しているし、アアルトのところでは何年か仕事をしてきたので君の役に立つだろう」

すぐにその場で電話をして、会う日を決めてくれた。

それまで私は散々歩き回って職探しをしていたので、あまりの手軽さに驚いてしまった。名の知られた人物と向き合った私は、根っからの世話好きにみえた老ロート先生に、思い切って切り出した。

「先生のアトリエで働くというわけにはいきませんか」

先生は少し考えて、今は仕事がちょうどとぎれているので残念ながら不可能だが、モーゼルなら仕事が沢山あるし、しょっちゅう彼と会っている、彼が最適であると思うと勧めてくれたので、私はもちろん異論はなかった。

ロート先生のフェローシップホームは建築の学生を何人か住まわせていて、彼のアトリエの仕事にも参加させているということである。ちょうど1973年の初春頃、彼の著書「回想のパイオニア」の校正ができあがって、最終の打ち合わせのために、バーゼルの出版元へ明日出かけるという日であった。

彼は日本に何度か来ているし、興味をも

っていた。又、ルイス・カーンの特集号をもってきて、「これはとても良い。日本の出版社は世界中で最も意欲的だ」といって、A&Uを私に見せた。私は日本の出版物については半年ほど知らなかったため、初めて見る号であった。カーンについては、ロート先生は否定的だった。彼はフォルマリストであって、それ以上ではない。当時、私が増田研究所にいた頃には何人かの建築の神様の内でも最も敬畏していたカーンをいとも簡単にはねつけているロート先生に、私は何か固いものをみたように思えた。

彼は当然ル・コルビジェの門下であってその絵を何枚か見せてくれたし、モンドリアンの絵と、アアルトの椅子を説明した。私はもう世界の一流の人々の仲間入りをしているような気持になってしまった。

ロート先生は、自ら紅茶を何杯も注いでくれた。紅茶カップはしかし茶渋が残っていたし一部が欠けていた。先生には夫人がいなかった。その理由はその後何度か彼のフェローシップホームに招待された際にも聞き洩らしてしまった。

□私の妻君

私が結婚したことをロート先生は非常に喜ばれ、是非すぐに連れてくるようにいわれた。

わたしは、ロート先生に紹介していただいていた、W・モーゼルの事務所で働いていたので定期的に電話で報告したり直接会ったりしていた。しかし、結婚に関しては、どうなるかわからない状態のまま、急転直下、決まってしまったので、突然の報告になったのである。

それは、1973年6月のことで、前日には、

私の友人がグループ旅行でチューリッヒに到着した。彼は、竹中工務店の設計部で働いていたので私は、ロート先生のところに会いに行くのに同行を誘った。

当日、いつものように赤いファルクス・ワーゲンでチューリッヒベルグのフェローシップホームへ行き、3階の彼の居室へ招き入れられた。私は、妻君と友人を紹介して、妻君とは仏語、友人とは、英語で話してもらおうように頼んだ。妻君は、3年間パリに留学していたので彼女の仏語を果たして教授は賞賛し喜んだ。そして私は傍らでのんびりと彼等の会話を聞き流すことができて、初めて彼の部屋をゆっくり観察することができた。

部屋は広く、南側は大きな開口で谷の向こう側の緑の木々が見渡せる。南側の丘にはこちらに向かってやはりロート先生の設計によるアパートが見える。彼はスイス建築界の大御所であるとともに、コルビジェや、カール・モーゼル教授のCIAM以来の伝統を受け継ぐ生き証人でもある。壁にかかっているモンドリアンの絵はいくら見ても本物であるという実感がわいてこない。この種の芸術品は美術館に陳列されているものであり、個人の家でみられるものは、そのコピーであるのが、普通の判断であって、これが悲しい芸術貧困国民の条件反射かもしれない。

傍らの仏語の会話はとぎれて、わが友人に向かっての英語に切り替えられる。

「私は、Mr.タンゲや、Mr.マエカワとは、友達であって、今年も日本でのコンペに審査員として行くつもりだ。彼らに会えるのを楽しみにしている。」わが友人は、そのコンペのことを知っていて、うんうんとうな

ずき、私の初対面の時と同様、どエライ人と話ができているのだという歓喜の表情が見て取れる。

□ロート先生と A.アアルト

ロート先生は、皆を連れて家の中を案内してくれた。もう一度改めて彼の美術品を説明し、「この椅子は、私がアアルトと共に、ルツェルンの集合住宅の計画を実施したときに使用したもので、その試作品を置いてある。でも中々座り心地が良いものだよ。試してごらん」。わが友人は、言われるままに座ってみて、うんうんとうなずいてみせると、先生は、満足して、台所や寝室を見せてくれた。どの部分もきちんと整理されているのはスイスのどの家庭でも同じである。1階のアトリエでは、若い学生が1人模型を作っていた。

ロート先生は、クウェートの女学校工事が完成したところで、その写真を見せてくれた。いずれにせよ、建築家のアトリエを見せてもらうのは、心が騒ぐことであって、しかもここだけはわが増田研究室のアトリエとも共通する雰囲気がある。居間に戻って、いつもの少し欠けた茶渋の残る紅茶茶碗にお茶を注ぎながら、「今度テルアビブで仕事の話があって私は行くつもりだが、アアルトは迷っているようだ。というのも、彼はアラブの仕事もしたいのでイスラエルでの仕事をするのにビビっているのだ」という。

現在、ヨーロッパの若い建築家たちのお手本は、北方のフィンランドの地の、アルヴァ・アアルトであって、夏休みにヘルシンキ詣でをすることを夢見ている。私の事務所のウルター・モーゼルは、彼の弟子で

あったので、毎年、夏にはアアルトの元へ行き、共にフィヨルドの海をクルージングしている。私自身は、行きたかったが北へ行くほど、物価も高く、そして遠いその国へは、ついに行かずに終わり、アアルト本人も、3年前に死去した、という報せが届いた。

それからチューリッヒのオペラ座のコンペで、以前ウッツオンが当選したのに、様々な理由で実施に至っていないことを先生は残念がっていたが、私はそのコンペについてよく知らなかったので、その理由を聞けなかった。

ZURICH 留学記(2)

Walter Moser 建築事務所

□LEIMBACH KIRCHE

“Wunderbar das ist genau japanisch Herr OKAMOTO sehr gut.”

私が、Moser 事務所で最初に与えられた仕事は、教会の礼拝堂内の天井のデザインであった。RC の躯体から天井を浮かせて縁取りをし、それに縁甲板を貼るというところまでは決まっていて、その貼り方のスケッチを求められたのである。

その教会は、やはりコンペで勝って実施に移されて、当時はすでに工事に入っていたものである。Moser は、アアルトの元で働いていたものだから、常にアアルトの影響下に設計を行っていた。アアルトの作品集の巻末に共同作業員として名前が載っている。

よく知られる通り、アアルトは天井に縁甲板貼りを好んで使用する。Moser は、師の作品集を私に見せながら、「この天井は素晴らしい。しかし、私は、これと違うものを考えている。同じ縁甲板を使う、同一方向に並べるのではなく、縦横自在に組み合わせたものを考えている。Herr OKAMOTO、君なら日本人的感覚で試みることができるだろう」と言う。

それなら苦もなくできそうであったので、初仕事として引き受けたわけである。

実施図面の天井伏面の上にトレペをあてて、色マジックで適当にやっていると、何とでも画けるのである。

青色で画いたり、オレンジ色で描いたりしていると、Moser がやってきて、一目見るなり、大喜びをしたというわけである。

「とても素晴らしい、実に日本的だ」と

大声で叫ぶ。こちらとすれば、デザインをすれば、何の困難もないことが、彼らには驚くべきことなのかもしれない。

私が最も怖れたことは、実施のための図面を画かされることであった。だから、私は例え面白くても、現実問題としては難しいですよと言ったけれど、Moser は全くお構いなしであった。

しばらく、別の仕事を何日かしているところへ、Moser がやってきた。「あのスケッチの線で行くことになったので、図面化するように」という。

「本当にこれを…?」というと「適当に画けばよい」と気軽に言って去ってしまった。

それでも、私は画いて行って、彼も OK を出したので、その件は落ち着いた。1 週間程後に、所員の 1 人が私のでたらめな図面を前にしてため息をついていた。詳細な面画を画こうとしているのである。私はホッとすると同時に、何か彼に悪いことをしたような気になった。



(上 : LEIMBACH 教会)

□設計競技

MOSER 事務所では、建築家グループと、ドラフト、現場監理者とが明確に区別されている。仕事は、コンペをとることによっ

て成り立っていた。

そのコンペが、コンペ要員を特別に編成して、2週間位カンヅメになる。

私の場合、当然、異国の地で詳細図を画けるわけがないことに加えて、一応は建築家の卵であるという紹介もあって、常にそのコンペ要員に加えられていた。

実施に入っているものも、まとまった規模のものはすべて、コンペでとったものであった。

Mannedorf 地区中心部計画

Dietikon 駅ビル計画

Leimbach 教会

が、当時の主な仕事であった。1つの仕事が実にゆっくりとして長い間かかっているので、年に1つコンペをとればよいというペースである。私が関係したコンペは、集合住宅のものが4等でまあまあ。Burach 教会センターコンペが1等であってすぐに実施にはいった。

コンペの締切りが近づくと、夜昼なく作業をつづけるのは、勤勉で健康的なスイス人社会では、以外に思えた。夜働くことは、一般的には考えられないからである。私は、増田先生のアトリエで、無茶苦茶な時間の使い方をしていたので、かえってその追い込みが肌に合った。

□奨学金

私の留学生という身分は、スイスでの外国人滞在許可証には、交換留学生と記載されている。ETH ZURICH 工科大学では、ドクターアルバイトも可能であった。

私にとって、留学とは、相手の大学での位置付けよりは、第一義的には、奨学金が出るか否かの問題であった。京都大学の増

田友也教授の主宰するアトリエが独自で行っている交換留学の制度は、不定期ではあるが、毎年何人かの学生を送り出している。それに伴い外国からの留学生を受け入れ、文部省からまわされてくる国費留学生もかなりいて、わが増田研究室のまわりには常に多くの外国人学生がいた。

とにかく、ETH で奨学生が出るが決まり、一応、ドイツ語を第二外国語としていた私は、大学院博士課程に籍をおいたまま休学届を出して、ZURICH へ飛んだのである。

奨学金は、大学の附属団体から月 800 フラン (1972~74 年当時約 9 万~10 万円)、支給されているので、奨学金受給者は、原則的には労働許可が与えられない。一方では、勉学に必要な奨学金を与えられながら、更に働く必要はないわけであり、有害であるとみなされるのは当然である。

私の場合も、留学生担当官 Dr.Badoux 氏はかなり当惑していたが、建築家の勉強は実際の設計活動の勉強をしないと意味がないという主張を受け入れて入れて、特別に許可してもらった。名目は建築科学生の民間事務所での実習のためということである。

ETH の学生は、建築学科に限られず電気や化学の学生も、民間工場等での実習が約半年間義務づけられていて、それに対する報酬は、時間当たり 2~3 フラン(300 円位)であった。

私が A.Roth 教授の紹介で Moser 事務所へ行った時、Moser は報酬について学生実習の線で提案してきたが、私はとてもそれではたまらないので、時間当たり 10 フランを要求し、結局、初めは 5 フランで様子を見て、10 フランにするということになった。

2ヶ月目から10フラン出してくれることとなり、私の留学生生活にゆとりができるようになった。但し、学生の実習は週20時間をこえることができない規則があり、最高で週100フラン、月間400フランの収入のメドが立ったのである。

私の寮費は、2食付きで400フラン位であり、奨学金のみでも充分生活できていたので、Moser 事務所での仕事は私に旅行の費用を作り出させてくれた。

それでも、元来怠け者の私は、労働時間が週20時間に中々達することがなく、いつもクビになるかと常に不安でもあった。

いずれにせよ、私は自分の望む仕事の間所と収入と奨学金とを得、赤い中古のVW1300を買って、留學生活の半分をチューリヒで過ごし、半分をヨーロッパ、アフリカに至る大旅行を敢行しつづけたのです。

□異邦人

Moser 事務所では、私は明らかに、何者であるかよくわからない異邦人であったはずである。

ETH (チューリヒ工科大学) に在籍する交換留学生であるという身分は、私を有利にしてくれた。

スイスにおいては、建築学科を有する大学はETH 唯一であり、しかもその卒業生は毎年100人に満たないのである。京都大学の修士課程を終えた私は、ETHの卒業資格と同じと見なされていた。

事務所のメンバーは、20人程度である、Moserは当然ETHのDiplom(ディプロム)を持っていたし、もう一人、かつてCarmenzind 教授の助手をしていたR.Benzinger との2人だけが、ETHを出て

いた。それ故に、事務所の所員は私を無能者市視することはなかったはずであるが、私は無能ではないにしろ、言葉のハンディ故に不可解な闖入者であったといえる。

朝は昼近くやってきて、早めに帰ってしまおうし、不定期に現われる。コンペ以外では、私は単独でMoser とのみと打ち合わせをするし、私は計画的な作業ばかりであって、実務で忙しく働いている他の所員からみれば、異質であったにちがいない。それに加え、大学の休みの間は、私は旅行のために事務所も休むので、所員にとっては、捉えどころのない、嵩高い学生のような、建築家のような、そんな存在であったろう。

…このような生活をしてきたためであろうか、日本に戻り、現実的な生活をしなくてはならない立場に立っている今もなお、忙しく立ち働いている人々を横目にのんびりとやっているのだが…

それでもスイス人特有の人づきあいの良さで、私はすこぶる居心地がよかったのであり、難を言えば、彼らの日常語であるスイスなまりのドイツ語 Schwizer Deutsch は、正統ドイツ語 Hoch Deutsch できえ苦しんでいる私にとって、異国語そのものであった。彼ら同士の会話は、私には素通りの世界であり、その仲間に入っていくことは至難であった。私と他の人々との会話はドイツ語であり、それは彼らにとっても外国語でさえあった。河内の人間が、東京弁を無理して話そうとするようなものであり、彼らには苦痛とまでは言わないにしても、とにかくそれは日常会話語ではない。

初めの1年は、そのスイスドイツ語は全く理解できず、帰国直前になって、ようやく大抵の会話が聞き取れるようになった。私

が口真似をすると彼らの口元から緊張がとけて、私は初めてスイス人の仲間になったような気になるのである。

事務所では、ドラフター等は全く使用されておらず、すべて水平の大きなテーブルの上に図面を広げて、水平定規か T 字定規を用いている。

私は、増田研究室以来ずっと T 字定規党であり、問題はなかったが、おどろいたことには、実施図面を含めて全てがインキング仕上げであることだった。文字は字型を用い、実に美しく図面を仕上げているところに、私は正当な建築設計の伝統を見た。厚手のトレーシングペーパーの上に、修正するため、薄いカミソリでゴリゴリこする音がいつも事務所で響いていた。

図面の大きさは全く自由であり、編集時に統一した寸法に折り畳めばよいという考え方である。これも所員の一人と議論したことであるが、建物の大きさや縮尺が違うのだから、用紙の大きさを決めてしまうと画けないではないかという意見が、この方法を選ばせている。

かなり多い仕事量に拘わらず、Moser 事務所はコピー機械を持っていなかった。これは、私の先輩の田中光氏(現在、金沢工大助教授)の働いていたイタリアの Magnani 教授のアトリエも同様であった。1 日に何度かコピー屋のおじさんがバイクでやってきては、伝票と共にコピーをしてきてくれるのである。そのおじさんの様子が、増田教授のアトリエに「マイド！」と言ってやってくる青写真屋の平安光業のおじさんにそっくりで、スイスにいながら京都に舞い戻ったようななつかしさを覚えた。

弱小事務所でさえ、全ての道具をそろえ

ている日本の状況とは、何か根本的なところで異なっている。

私は民間の設計事務所を経験することなしに、独立開業したのであるが、この Moser 事務所での 1 年半くらいが、それに対応するものであるといえる。

ZURICH 留学記(3)

□コルビジェセンター

1972年10月にそのころイタリアのサボナという街に居られた、田中光先生夫妻と中島和郎氏とが、チューリヒをおとずれた。

ローマ大学教授である Magnani の事務所が Genova の西隣、Savona にあり、そこで京大の助手を給食として働いていた田中光氏のところへ、スペインに1年留学した後合流した中島氏と、私を加えた3人のメンバーが、チューリヒに集まると、これで仕事さえあればすぐにアトリエ活動を始めることができそうな錯覚さえ持った。

当地にあるコルビジェセンターや、ベルンの Siedlung Hallen、Ronchamp の教会 Flamatt の集合住宅ラ・トゥレットの修道院等を見て回ろうというのである。実は、チューリヒにコルビジェセンターがあることなど私は知らなかった。彼の作品集ではそのスケッチだけの記憶であったし、もしも写真を見ていたとしても、それを模型写真であると思っていたようだ。しかも、まさしくそれは模型を拡大したままのようであった。

チューリッヒ湖の入口付近は公園化されていて、市民や観光客が自由に遊び、歩き回れるようになっている。いくつかの建物はそれぞれ何かの記念館として用いられていて、コルビジェセンターもかなり広い芝生の盛り上がったところに建っている。しかしそれは、か細くひ弱であった。他の建築物が普通コンクリートの固まりであるのに比して、これはまるで鉄とガラスとペンキのバス停留所のようにあり、これを評して素晴らしいものというにはためらいを覚える。主義が勝ちすぎたアジテーション・

パビリオンであると考えれば心を騒がせることもないだろう。

コルビジェセンターは、建築家の死後彼のスケッチをもとに建てられたものである。CIAM 運動の後継者でもあった Weber 夫人が建て、市当局が用地を提供したという。

ヨーロッパの近代建築運動はチューリヒにその主力があった。ヨーロッパ各地の戦乱は、学者・芸術家達を祖国からひき話、中立国であるスイスには一大文化圏が成立した。ダダイストやシュールレアリストたち、レーニンをはじめとする思想家・革命家たちはバーゼルやチューリヒを中心に活動し世界史を動かし始めていた。

ETH チューリヒ工科大学では、カール・モーゼル教授が活発にコルビジェやグロピウス等を擁護し組織化して CIAM にまとめていった。モーゼル教授はコルビジェを一度は ETH に招聘しようとさえした。このようにこの地はコルビジェと因縁のあるところであり、彼を記念してセンターが建てられ、市当局が用地を提供したというのも、十分納得のいくことである。

センターは Weber 夫人の財団管理の下にあるが、その経営状態は良くないらしく、建物は閉鎖されたまま、私が帰国するまでついに開かれなかった。外部は明るい透明な日差しを受けるとその色の鮮やかさは見事であり、また前面の浅い池に映る姿は美しいといってもよいが、あくまで絵画的であり、建物という人間生活のスケールでの美しさではない。コルビジェ生前の作品ではないから、という擁護は力を持たないであろう。

とにかくチューリヒにコルビジェセンターありということで、私は2年間の間、友

人や先生方の来訪をしばしば受け、その度毎にここを訪れたのである。その第1回目の訪問は、私の先輩達との旅の出発日であり、すぐにその足でベルン郊外のハーレンジードルング **Siedlung Hallen** へ向かった。自動車はやはり VW フォルクス・ワーゲンである。

□ハーレンジードルング

コルビジェセンターを見た後、私たちはアウトバーンをベルンへ向かう。ドイツ同様スイスでもこのアウトバーンは無料である。フランスやイタリアでは料金を取られるので旅行の予算に入れておかななくてはならない。制限速度の標識はなく、一応は無制限であるが、オイルショック以来 100km/h に自制することとなり、かなり一般的に守られている。セルフコントロール、シビリアンコントロールの精神が、日本と比べものにならないくらい発達し、これが国家・社会を成立されている基盤にそのものであるように見える。

ガイドブックによれば、ベルンの郊外北西部に **Siedlung Hallen** があるので、それらしき方向へ走るのであるが、その郊外の程度はわからない。それにしても2回途中で道を尋ねるだけで済んだ。その後の、ヨーロッパを走り回った経験からでも行き先が不明で道に迷うことはほとんどなく、道路標識や地名表示法にわが国との差が感じられた。**Hallen** の小さな看板を見付けたが、それは徒歩で入口であり、車は山裾を迂回して登ってゆき突然その集合住宅の中に入ってしまった。私たちが予想する集合住宅＝アパート、マンションのイメージとは程遠く、大学の寮やクラブの部室が並ん

でいるような、素っ気ないものであった。汚いコンクリート打ち放しとペンキ色と、そして樹木だけであり、建築家であると自認していた私にとっても「住めるのか？」の疑問符が浮かんだ。

しかし、それでも「有名」とは大した事で、私は、これは良いものであるはずだと思いつみながら歩きはじめてしまう。人影はほとんどなく、木の葉が舞っている道路はすでに過疎の村になってしまっているようで、現代建築に希望を持っていた私は少し不安の影がよぎった。

しかし、緩い狭いスロープを上って行くと、ふと横の通路から年配の女性が出て来た。それだけで荒涼とした空間に生気が浮かぶ。ふむふむ、建物はあくまで人間の背景であり、住む人間にとって邪魔になりさえしなければよいのだということを思い出して、よしよしコンクリート打ち放しでも大丈夫と一安心するのである。

一通り歩き回って、やはり中を見たいねと言いながら、あつかましいかなとか、我々のような見学者がいつもウロウロしていて、不細工に思われているかもしれないと気にしたり、しかも見せてもらうには私が交渉しなくてはならないし、それもスイス滞在2ヵ月足らずの私には荷が重い—と一人なやんでいると、向かいから優しそうな婦人が歩いてくるので、私は声をかけてしまった。

彼女は、私たち4人を快く室内に招き入れてくれた。室内は広いわけではないが、よくまとまり、何ととっても整理が行きとどいている。ヨーロッパ人は一般的に住み方に大きな関心を持ち、インテリアを大切にするのであるが、このコンクリートボッ

クスの中に親しみのある生活空間を造り出せるのは、つまり住み手としての空間レベルの高さなのであろう。ご主人は画家で、前庭の下部をアトリエとして使っていた。写真も撮らせてもらったし、スイス人は親切だねといいながら満足して辞した。

最上部から見渡すと、この集合住宅より美しいとさえいわれる、コンクリートアーチ橋が見えた。まちがいなく我々は **Siedlung Hallen** へ来たのだと確信してベルンを離れ、アトリエ 5 のもう 1 つの建物を目指して走り出した。

□FLAMATT の集合住宅—ATELIER 5

Siedlung Hallen を見学した後、ベルンの南郊 **FLAMATTA** にある **ATELIER 5** の集合住宅に向かう。

そこは当然小さな村であろうし、少し走り回れば見付かるだろうと言いながら、ふと視線を横切るコンクリートの建物を振り向きと、それが目指すものだった。ガイドブックを見比べて間違いなさそうであり、いとも簡単に見つかるものと一同で感心した。前面に充分な空き地があり、背後に大きな樹木が並びいかにも写真に撮ってくださいといっているようだ。

一般的に、ヨーロッパの建物は写真を撮りやすい。視線を確保するというを都市においてさえかなり大切に扱っているように思える。日本では一生懸命設計しても、それはイメージパースにすぎなくて、全体の実物を見渡せる程条件のよい敷地は少ない。しかも看板・電柱・電線等に邪魔されてしまう。景観の問題を軽視できないというは日本の自治体でもようやく着手されているが、100 年程時間がかかるだろう。

私たちが建物の周囲をぐるぐる回っていると子供たちが話しかけてきた。有名な建物だから見に来たのだよという、一度家の中に入り、戻ってくると中も見てよいからどうぞという。**Siedlung Hallen** では私たちは小心であったが今度は向こうから声をかけてくれたので大喜び。居住者にとっても、有名な建物に住むというのは誇りであり、見られることにためられるどころか喜んでいっているという意識さえあるようだ。突然の訪問者の目にも家の中は整頓され美しかった。メゾネットのタイプであるが空間の処理が丁寧で豊かであった。

また、住み手の空間意識の高さが住宅そのものをいきいきとさせていて、そこがわが国の住宅を使う人に欠けているところでもあろう。近代的な都市に住み、高価な洋服を着て、新聞社主催の文化教室に通い、アスレチッククラブやテニスコートを彩り、おいしいケーキ屋さん和紅茶のブランドの情報に詳しいファッションミセスたちが、どうして乱雑で無節操な家の主婦であり得るのか不思議でたまらない。

日本では近代以前、何もものを家の中に置かなければそれで良かったので、何か物を置いてよく見せようとするものの訓練ができていないからなのだろうか。戦争により日本文化も破壊され、文化的基盤が消滅すると同時に、文化的自信というものさえ人々の心から失われてしまったのだろうか。それを回復し育てていくには、100 年程時間を必要とするかもしれない。一方、20 数年の間、私自身に染み付いてきているはずの文化的怠惰性をゆり動かし、ヨーロッパの文化に接することで、最大限自らの心を刺激していかなければならないと思い始めた。

中世の都市 **Bern** の街並はそれまた美しく感動的であり、その郊外にコンクリートのままのアトリエ **5** の建物がいくつか生まれてきている。このような事柄が平然と行われていることが、滞在数カ月の私には新鮮でたまらなかった。

ZURICH 留学記(4)

□国境の風景—RONCHAMP の教会—

フラマトの集合住宅で気を良くした私たちは、次はいよいよル・コルビジェのロンシャンへ向かう。

ロンシャン…

何と夢のような響きであろうか。1972年秋。当時海外旅行がようやく夢でなくなりかけていたけれど、留学から戻ってきた先輩たちの話を聞きながら、写真集を引っ張り出しては声も出さず眺めていた学生の頃の遠い記憶がよみがえる。夢と記憶とがまるで地と図の如く反転を繰り返す。

小さな町であると聞いている。名高い教会であったとしても、仲間の間だけの話であって普通の地図には載っていないのではないかと思うのであるが、スイス・フランス国境 BASEL (BALE) を西へ抜けると BELFORT の近くに小さく、しかし確かに RONCHAMP の地名が読み取れる。

バーゼルの国境は出勤時と重なった。チバ・ガイギやロッシュ等の化学工場はライン川沿いにあり、それらの排水は即座に、ドイツ・フランス領内に流れ去る。スイス国内の川は汚染されずに美しい庭園国家として観光客を集めることができる。工場に働く労働者たちが国境をフランス側から群れをなしてやってくる。

スイス政府は人口の増加を極力抑えようとしている。一方、肉体労働をさけたがるので、外国人労働者を必要とするという矛盾がある。それでいて、物がなくなると出稼ぎ労働者を疑い、まれに起こる殺人事件はイタリア人が引き起こしたと口に出る。そういうことは、わが国でも同様であり、西洋人尊敬に値せずと、たちまち尊王攘夷、

皇国思想に陥る。

国境を過ぎても、北側にバーゼル国際空港が続いていて、しばらくは平地であるが、そのうちに山の中に入って行く。地図は、国毎に色分けがしてあるだけの場合、土地の起伏がないもののように錯覚され、そこに山が現れてくるとあらためて、都市と都市、田舎と都市、国境等の地理的必然性が理解されてくる。

国境はなるほど国境となるにはふさわしい地理的特徴を備えている場合は、単純な旅行者には安心感を与えるのであるが、何の変哲もないところに遮断機があると、そこは歴史的な戦いの結果、この線が定まり、それはとりもなおさず暫定的でしかなく、いつのしか戦いが再発するのだと思ってしまう。そうすると、その時というのは即ち今、私たちが国境を超えるこの時であるような気になってくる。そこまでくるともう、走り去る背後に不安を覚え、できるだけ速やかにこの非武装中立地帯を離れて安全な武力制圧領域に安らぎたい想いに駆られる。

向こう側から自転車で作ってくる労働者たちは、私のそんな思いをあざ笑う如く、お弁当をハンドルにくくりつけて、妻や子供たちとあたたかい団端の夕べを心に描きながら、のんびりとペダルを踏んでいる。

ふと私はひとりぼっちの自分に気がついた。

□ロンシャンの村

ロンシャンの教会はル・コルビジェの作品であり、それは憧れのフランスにある。しかし、誰もが陥る偉大な錯覚ではあるが、パリの近くにあるように思っていた。つまり、フランスにあるものはみんなパリにあ

って、フランス国中が、パリの街かそれともパリ郊外にある…そう思い込んでしまっている。

それなのに、ロンシャンはスイスからでかけて行って国境から数時間のところにあるなんて思いもかけなかった。それもド田舎の小さな建物であって、それがまた極東の地の小さな国の心優しき学生たちの誰もが知っているものでもあるなんて…。

国境を越えてパリの方に向かって走っているのにどんと田舎の方へ入って行く。地図にある小さな RONCHAMP の文字がふと道路沿いに見えると、向こうの丘の上に葉の落ちはじめた樹々を透かせ、それらしい影が見えた。

作品集を画面いっぱい溢れそうなこの教会も、実は大きな山や自然の中に埋もれるように立っているということが新鮮な驚きであった。

しばらくいくと、村の中心を通った。そこには小さな教会があった。ノートル・ダムと名を付けられたこの古い教会のかわりに山の上に教会をつくろうとして、コルビジェに設計を依頼したときいている。古い教会は、火事にあつたか、もしくは手狭になったためだったかの記憶はうすれてしまった。

山の上の教会へ登る道は標識が立っている。ヨーロッパをまだよく知らない若者は、ノートル・ダムのというのはパリにあるゴシックのあの教会だけだと考えていた。だから山の上の教会への登り道を示す標識も、本当はよく意味が分からずに、しかしとにかく登って行った。

もう日は暮れかかっていた。教会が近づいてくるにつれて、何度も何度も車を止め

て写真を撮る。そしてついに頂上へ着くと、大きな駐車場があって、レストラン付きの案内所があり、絵葉書やパンフレットを売っているところで見学料を払う。その上方に教会がある。逃げはしないのに、大急ぎで写真を撮る。作品集で見た同じ角度を何故か懸命になって探す。

まわりを一周して裏口の方から中へ入る。床は緩やかに祭壇に向かって流れるように傾斜している。それがかえって、自然の丘の上の傾斜そのままに壁と屋根を作って覆っただけというイメージを感じさせる。椅子に座って、前やら右左や後をキョロキョロみる。

有名人の傍らで全く無関係な見物人の如く、私から他者への一方通行の感情だけが流れる。

見たことは決して「勝ち」にはつながらない。むしろ、見に行ったことにより、他人が評価した彼のコルビジェという人物を私自身が評価してしまう、その勝負の決着を自ら敗北の側のくじを引くために来てしまった。

私は近代建築を見るとき、いつもそう思う。だから敗北感をもたないためにも近代建築をあまり見に行かない。

ル・コルビジェには負けても仕方がない一とは思いたくない。

この教会には、建築的評価は別にしても、個人の意志、個人の手作業の痕跡がはっきり見て取れる。設計者も職人も大変だったと思うけれど、どの部分をとってもおろそかにしていないし、すべての部分に人の息吹が読み取れる。あくまで人がつくり、人が使うという人間の英知がある。

一応、山を降り、今晚はこの村に泊って

明朝また登ってこよう。この小さな村の小さなホテルには、かつてロンシャンを見るためにやってきた人々が、ル・コルビジェのお懐に抱かれるようにして泊まったのであろう。

増田アトリエの先輩たちとの今日の小旅行の最初の宿泊地で私たちは赤い葡萄酒を囲み、言葉少なく、心に教会の遠景を抱きつつ、夜の更けるのを待った。

□無名

朝日に照らされたロンシャンを見よう、なんてお互いに誓い合ったのに、皆が顔を合わせてカフェ・オレを飲んでいたのはもう10時に近かった。

昨夕登った丘を、今度は一度も止まらずに駐車場まで走り、2回目の見学である。初日と2日目とは本当に大変な違いである。ロンシャンに関しては、私はすでに経験者であって、古株で、家主さんみたいな気持ちである。今日、登ってくる何人かの見学人を見下ろしては「今頃初めて見に来たのかい、このロンシャンを」なんて言ってやりたくなる。「正面の扉は閉まっているから裏へ回るといいよ。でも写真はとれないよ」と声をかけたくなる。

ヨーロッパへ来て、最初に旅行している間、例えば Firenze のユースホテルに泊まった時にも、そういう気分になった。地図とかガイドブックにかじりつきながら見知らぬバスに乗り、一生懸命窓の外を覗き、YH のマークを求めてようやくたどりついた私は、勝手のわからないまま受付開始を待ち、自分の荷物を必至に確保し、宿泊 OK をもらってベッドを決め、食堂では見様見真似でお盆をもって並び、シャワーの具合

も違い、便所の具合も違い、もう泣きたくなるような心細さで夜を迎える。

食事のときは、日本人らしい人の傍へ寄っていき、そっと「コンニチハ」と口から15cm 位のところで挨拶をする。もちろん、その相手が日本人以外の東洋人青年であった時の気まずさをゴマかすために、初めから逃げ腰で話しかけている。そのくせに、いけ好かない男がやってきたら、眼をわざとそらせておいて「コンニチハ」と話しかけられても肩をすくめて首を振ると、その嫌な男は、バツ悪そうに行ってしまうものだ。

そんな臆病な私が、次の朝食を済ませ街へ探検に出かけて夕方のユースホテルに戻ってくると、もう自分の家みたいな寮みたいな気分になって、その日に初めてやって来たような汚らしい若者を横目で見ては「このユースは気を付けろよ。ボリビア人のグループが住み着いていてね、どうも物がよくなるんだよ。一週間前にもリュックの中のカセットを取られた日本人がいてね。それも中身の納め方もそのままそっくり元通りにしてあったらいいのだから…」と教えてやりたくなる。

3日目にもなると、ユースの日本人グループの中ではいい顔になり、牢名主みたいな気分である。

牢名主とまではいなくても、翌朝のロンシャンはもう、私には慣れ親しんだ友であり、コルビジェはもうすっかり仲間になっており、仲間のつくった建物だから好意的に観察できる。写真だって昨日ほどには撮らなくていいし、自分の目で見ておけばよい。屋根の浮き具合・壁の隅の扱い・鐘桜からのトップライトなど1つ1つのヴォ

キャブラリーにうなずきながら、写真では見えなかったものを探す。

東に面した祭壇の横手のマリア像が明るい開口部に立ち、それが逆光によって像自体の表情が見えずに、背後から滲みだす光の力に、信仰への誘導の計算された効果を見た。実は2日目にもなると、大胆になり、ちゃんと教会内部で写真を撮った。

建築家になれるかどうか分からない若者にとって、建築家の存在は遠く、はるかに不安そのものである。挫折の可能性の方が大きく、挫折というよりはむしろ、ただの日向見の横滑りしてしまう、「確実とも言える落胆の可能性」が垣間見える。そんな若者は、ロンシャンを前に自分に気付き、目を落してしまう。何人か来ている見物の若者たちは、私にとって無名でも、もしかして欧州では名を為し始めている人物なのかもしれない。

—おい、君たちは、僕を見てどう思う。建築家の顔をしているかい。言ってくれよ、このロンシャンの丘の上で、僕は何者に見えるか言ってくれよ—

ZURICH 留学記(5)

ロンシャンの教会では「素晴らしいということは、こういうことを指すのかもしれない」という、学習的な気分になったり、それでいて「本当に自分にとって確信しては賛成できない」という、バスに乗り遅れたような気分になったりして、何ともすっきりしないままに終わってしまった。

増田友也教授のアトリエは、京都大学の建築系教室の中でも一種独特の雰囲気をもっているところであった。教室関係の一連の建物群の中でもやはり独立したコンクリート打ちっ放しの固まりである。しかも新館建設時に移設して地下部分がかかなり地上に持ち上がったという代物で、私たちのアトリエのメンバーにとっても、それが精神性そのものであった。

まだ学部学生で、どのゼミを取るか決める前であった頃には、異様でしかも、酒と女とデカダンの巢のように思われ、それ故に敬遠する仲間も多かった。私が3回生の秋頃からパリの5月革命の余波をうけて京大でも大学紛争というものが巻きおこり、学生寮・医療グループ、そして文学部と続いて、団体交渉・ストライキ・バリスト等と局地的に噴出した。工学部では、建築学科でも製図室自主管理を掲げて団体交渉に入った。

そのうちに、日大の全共闘が京大に出張してバリストをかけるという噂が広まり、一夜のうちに本部構内を大学・職員・学生に動員をかけ、逆バリ封鎖を貫徹。私なども構造系の先輩から住友ベークライトのヘルメットの配給を受け、何色に塗ろうかお互いに話し合ったものだ。かなり記憶も遠いのはっきりしないが、赤一社学同、青

一社赤同、黒一日大全共闘とか、当時はヘルメットを見ただけで興奮し、セクトをあてることに当事者的満足感を覚え、彼らのシンボルたる鉄パイプとナップサック、そして手ぬぐいマスクを目前に見て、世界中の歴史の真只中にいるようで、寒い季節でもあり、心と体が震えて仕方なかった。

京大全学逆バリ封鎖の時、柵越しにデモル原色に塗ったヘルメットの列にむかって、消防ホースで水をぶっかけるというのは真に壮快であった。大学を枕におにぎりの配給を受けながら仲間と騒ぐという戦国時代みたいな緊張は得難いものである。

翌朝は新聞にも大きく報道され、朝日が快挙と書いたのにサムライたちは大いに満足し、毎日は「しかし…」と但し書きを付けたことに憤慨したものだ。とにかく、各紙の取扱の大きさに納得をして、徹夜の籠城態勢も、敵襲撃がないとみて解除され、私たちは快い疲労を従え、狭く平和な下宿に戻り眠りについた。

その後、建築共闘会議（建共闘＝ケンキョートー）が組織され、一方では自治会系が団結して友人・同級生同士で血を流しあっていた。

建築学生会議(JACAS)は、私は3回生の時点で京大支部長を名乗り、間野博君（現、アーバンプランニング研究所）、西田謙君（洋々社）などが活躍し、関西ブロックでは、大阪市大の赤崎弘平君（現助手）が苦勞を背負っていた。しかし、大学紛争はこのJACASの存続さえ揺るがせてしまい、無用として解散方針をとった。

ある晩、バリケードを積まれた建築の新館へ入った時、エレベーターホールでどこかで見たような男の人と出会った。その傍

に増田先生がいて親しそうに話をしている。その見たような顔の人が誰だったかどうしでも思い出せなくていらいらしながら一週間ほどしてテレビで見つけた。当時の劇団「雲」の小池朝雄であった。いつも悪役のくせのある俳優であった彼が、増田先生と友達であることは私がアトリエに参加した後には知らされ、そのうちに私さえもが「朝雄ちゃん」と呼ぶようになった。

とにかく秘書以外にはほとんど女性をみかけない教室の中で、アトリエには様々な風体の女の子たちが出入りしていたし、それはうらやましいよりも、恐ろしい方が先に立った。

アトリエの作業は昼夜関係なく、アトリエ・進々堂・祇園と場所を選ばずに厳しく、又、常に酒を伴っていた。議論とエスキースが絶えず行き交い、京大記念講堂・豊岡市民会館・京大工学部本館等とかなりの規模のプロジェクトが並び活気に満ちていた。そのアトリエには常にコルビジェの作品集が置かれ、様々な部位でのディテールの検討のために開かれていた。

階段で、特に印象に残っていたものがあり、修道士と一緒に写っていたその写真は、ラ・トゥレット修道院であった。単純な幾何学図形の中での有機的な人間の姿が実によかった。

ラ・トゥレットの修道院は、村を外れた丘の中腹にある。緩い登り道を上がっていくと駐車場が用意されている。

まず、付属の教会に入る。直方体の単純な箱の中に教会がある。これはロンシャンの情感的とさえ思える教会と対比してかなり異なる。見た目には異なるが映るだけなの

かもしれないが、とにかく違うといっ

てもいい。直方体の箱にサイドライトを取って壁の低い部分に光を入れている。コンクリートの箱というのは増田研究室ではなじみのものである。ロンシャンの教会のようなものはとにかく偉大な才能が必要な気がする。しかし、誰でも建築家を目指す人間が、これさえやっておけばよいという最低の水準だけは叩き込むという増田友也教授の考え方に沿って、これなら私にでもできそう、頑張ったらできそうと思う。

先生は「教科書としての建築」を狙っていると、事あるごとにいう。それは誰が真似してもいいというものである。近代建築運動は様式主義の否定から始まる。オーギュスト・ペレや、ル・コルビジェは、自らの新たな建築を目指した。が、偉大な人々の後に続くものはそれを様式として真似していきがちである。ル・コルビジェが否定した様式主義が皮肉にも、コルビジェスタイルとして世界中を駆け巡った。

私たちのアトリエでも、ル・コルビジェはお手本であった。しかし、誰が真似しても良いものは決して様式というものではないと考える。柱や梁やコンクリートやラーメン架構や、幾何学的法則や構造力学等は様式というものではない。様式を構成する要素ではあっても、様式ではない。それはあくまでも空間的要素である。

私は、ラ・トゥレット修道院に、そのあたりを読み取るつもりでいた。この付属の礼拝堂は、何とか理解されるものを感じた。修道院の見学日は指定されていて、私たちのスケジュールにあわなかった。別の機会に出直すことも可能であったのであきらめ

ることにした。しかし、出直す機会はないに
来なかった。残念な気もするし、十分見
たような気もする。

修道院の前方には、白い馬を放牧してい
る。写真を撮るために、その柵のまわりを
歩いていると、その白い馬が猛烈に走り出
し、私に向かってきた。柵は低いし、弱々
しかった。私は蹴り飛ばされるかと思っ
てひるんだ。そしてひるんだ私に敗北感が漂
った。こういう建物を見に来るといっても感
じるあのメランコリーである。

同行の田中光氏夫妻と中嶋和郎氏はイタ
リアの Savona に帰ってゆく。私は、チュ
ーリヒに戻る。彼らはジュネーブからアル
プスの下をくぐるモンブラン・トンネルを
通ってミラン、ジェノヴァを経由して帰る
という。私はロザンヌまで車に乗せても
らって、あとは鉄道で帰ることにする。

増田研究所の修学旅行のような気楽な、
しかも高揚させられた旅から、再び一人ぼ
っちの、時間を持て余すあの学生寮に戻っ
て行く。チューリヒでの留学生活はまだ 2
ヵ月しか経過していない。この 12 倍もの時
間が残っていると考えると、ますます落ち
込んでゆく。

一般的に留学生は、夏にヨーロッパへ行
き、慣れない生活に戸惑っているうちに暗
い冬がやってくる。「ドイツの冬は気分が重
いんですよ。あの黒い雲がすぐその頭の上
にまで覆いかぶさってきているような毎
日ですよ。気がおかしくなっても不思議が
ないです。」京大の独語の助教授の高津春久
氏は、「大原野の家」の設計打ち合せの時に
教えてくれた。遠藤周作はリヨン留学では
肺病に怯え続けた。『留学』という小さな文
庫本は留学生にとってのバイブルであった。

私はパリでその本を読みまわしている日本
人女学生たちから貸してもらった。怯えつ
つも何とか勉強をつづけている留学生たち
に激励を…。

学生寮は 1 人部屋 11 室、2 人部屋 5 室で
その他に来客用 1 室、管理人家族用住居、
職員用 1 室、洗濯室 2 室、集会室兼食事室、
厨房、シャワー室 3 室、WC5、卓球室、ボ
イラー室等で構成されている。

学生はスイス人が約 1/3 で残りは外国か
らの留学生で、日本人が 3 人、南米ポリビ
ア人、イラン、アメリカ、オーストリア、
オーストラリア、ニュージーランド、トル
コ、イギリス、ロシア、チェコ、ハンガリ
ア、インドネシア等、ほとんど偏りなく分
布しているが、アフリカ人は、一時期タン
ザニアの学生がいただけで、スイス全般的
にいても少なかった。

チューリヒには、ETHZ (チューリヒ連
邦工科大学) と UNI (チューリヒ州立大学)
の 2 つの大学のどちらかへ通い、中には入
学準備中の学生もいた。いずれにせよ大学
に関係するものたちばかりで、おおむねか
なりの勉強量をこなしていた。

1972 年 8 月末に日本を発ち、カイロ経由
でチューリヒに着いた私は、2、3 日の間に
宿を決めたりする準備をした後に、Paris
に行き、その後フランス、イタリアを 1 人
で約 1 か月間旅行した後の 9 月末に、よう
やくチューリヒに帰ってきた。寮で私を待
っていたのは、玄関脇の郵便受けに溜まっ
たたくさんの手紙類であり、そして気の良
い学生たちであった。

寮の管理人は、Ritter 氏であり 3 人の子
供たちを持つ家族で、寮の中のかなりにおお
きな住居部分をしめていた。寮はプロテス

タント系の **Reformierte Kirche** (改革派) の系列下にあり、そこはチューリヒに3ヶ所学生寮を経営していた。

そして **Ritter** 氏はその牧師さんであり、その家族を **Familie Ritter** と呼んでいる。**Ritter** 氏は、食事の開始には、テーブルのまわりに学生がそろいのをだまって待ち、時には横目でにらみながら待ち、祈りの言葉もいい、皆でアーメンと行ってから **Gute Appetit!** (良い食欲を!) と口々に叫びスープを食べ始める。管理人へはどこかで必ず不満が出るもので、口の悪い学生たちは、そのような場合、聖家族 **St.Familie** と呼んだりもする。

部屋は2人部屋になるかもしれないと予め言われていたけれど、私の希望通り、1人部屋を用意してくれていた。西向の部屋ではあったが見晴らしも良く、問題はなかった。

寮の内部は全体にクラスター方式をとっていて、京都の下宿や学生アパートとは大違いの設備である。個室には各々、ベッドと板、椅子、本棚、ソファが備え付けられてあり、共同部分には、各人の物入れと洗面台2個とWC (ドイツ語圏の生活の雰囲気味わっていただくためにはヴェーツーと発音して頂きたい。余談ながら、ドイツの名車 **BMW** はベーエムヴェーと呼んでもらわないと気が抜けて仕方がない…)がある。

暗くて陰鬱な冬を過ごして、なんとかノイローゼにかからずに済んだと自信を持って、遠い友人たちに手紙をかけるようになる頃、スイスでは各地で **Fasnacht** ファスナハトのお祭りが繰り広げられる。まだ寒いけれども夜明けも早くなり、夕暮れもゆ

っくりとして来たことがはっきりとわかってくる。そんな頃、新聞では小さな村のお祭りの記事が次々とみられるようになる。ある週末に仲間とスキー行った帰り道、たまたま入った村のレストランで大騒ぎとなり、突然のカーニバルが、白い雪に包みこまれたままの小さな村で、雪の下のふきのとうの芽生えの如きエネルギーを感じさせられたこともある。

春を迎えるためのキリスト教の儀式であり、1週間の断食を課せられた期間があけた時に”**Fas** (断食)の夜”という名で呼ばれる。スペインや、その他の国々でのいわゆるカーニバルである。人々は大きな仮面を付け、飾りを付けた催し物に群がり、街中を、村の路地を練り歩く。地方により少しずつ日が異なり、その中で特異な **Fasnacht** が **Basel** である。スイスの工業都市バーゼルも又、ライン川を頼りに古い歴史の中で成長してきた都市であった。

真夜中の4時にそれは始まる。

私たちはチューリヒにいたので **Basel** へは、約1時間で行ける。臨時列車が夜中の間も運行される。私たちは車で2時頃に **Basel** へ着き、適当なところへ停めて人々の中に混じって行く (一般的には都市部でも、夜8時をすぎると駐車禁止は解除される)。**Marktplatz** マルクプラッツは、ゴシックの市庁舎の前の広場であり、日を決めて市が立つ。その広場に集まってくる人々の数は、暗闇の寒さの中を、どんどん増え続け、身動きのとれないまでになってくる。ソーセージ焼の出店が食欲をそそる煙を吐き出し、私たちも、コーラやビールの瓶を片手に、それが始まるのを待つ。人々は小声で話し、足踏みを繰り返しながら待つ。

ZURICH 留学記(6)

静かに、Still…、スティル…

お聞きよ、Hor…、ヘーレ…

確かに笛のおとだ、あの小さなフルートの音が。

そう、2 時を過ぎている。バーゼルの暗闇の Fasnacht の始まりだ。笛と小太鼓の無言の交信が始まった。真っ黒の空の下、古い町 Altstadt の狭く、湾曲した、そしてすべてが広場へとつながってくる路地毎に行進がやってくる。次第にそれが近づき空から聞こえた笛の音が、古い石壁に反射する鋭い音に変わってきて、小太鼓の連弾が、わずかに空腹を覚えている私の身体を共振される。

突然、人々が動き出し、隙間ができた目の前に、フルートの列が現れた。若者というよりは少年たちの無言の息遣いが、私たちの前を歩いてゆく。暗闇の中から語りかけるが如く、暗闇の歴史の彼方から無縁仏の魂がよみがえるが如く…それは、古い街のねっとりした空間からはみ出してくる。

チューリヒでの 4 月のお祭りは、Sechtleuten と呼ばれる。語源は「6 つの鐘」である。かつてこのお祭りで市内の 6 つの教会の鐘が鳴り響いたからと聞いている。

オペラハウスの広場を中心に繰り広げられるこのお祭りでは、ギルド単位での行列が見物である。私たちは、その行列をリムマト河沿いの歩道で見物した。

春によく到達し、人々は家の近くから少しずつ生活圏を広げて街へ出てくる。歩道で、お祭りの行列を待つ間も、何とかじっとしておれる程に暖かとなり、その列

が、かなりつづく間も、寒さを忘れておれる位の春になっている。

ギルドは Gewerkschaft ゲヴェルクシャフトと言ひ、各業種団体である。各々に中世の服装のままに隊列を組む。靴屋ギルドは、大きな靴の張りぼてをかつぎ、鍛冶屋は、フィゴを吹きながら、パン屋ギルドはパン屋の帽子をかぶってパンを沿道の人々に配る。肉屋は肉切り包丁を振り回し、石屋は槌とのみをもち、大工はのこぎりを持ち、洋服屋ギルド、粉屋ギルド、印刷工ギルド、家具屋ギルド、ビール醸造ギルド、陶工ギルド等々がつづく。

中には、行列を一目見ただけでは、何のギルドか分からないのもあって、それを考えるのもまた楽しい。

ギルドの連合組合の役員たちもまた歩いてゆく、沿道の顔見知りを見つけては、平気で列をはなれて歩み寄って行く。声を掛け合う。街の人のお祭りは、行列する人と、見る人とが、いつ入れ替わっても構わないとさえいえる程につながっている。

京都の葵祭や時代祭等は、学生アルバイトの行列であって、白けた、ふてくされた表情のまるで、通勤途中のサラリーマンの列のようなものである。歩く人をただ黙って見ているというこのような行列は、観光化ということそのものである。観光化がアルバイトにさえ日当を払える程にどこかで現金換算を可能にしている。

行列が一通り行き過ぎてゆくと、沿道の人々は、街の中へ広がっていく。ウインドーショッピングをしたり、チューリヒ湖で鳩や鴨や魚たちにパン粉を投げ与えたり、白鳥の着水を眺めたり、ぼんやり、南の方の白く光るアルプスの山々に手をかざして

みたり、MINOLTA のカメラを得意気に首からぶら下げて、小さな女の子の手を引いたり、酒場で一杯ひっかけたり、ティールームでとてつもなく甘い真っ赤なケーキと紅茶を飲んだりしながら、夕暮れを待つ。

オペラハウス前広場には人々が輪を作って、中心に雪だるまを模った人形の周り、馬に乗った人々が入れ替わり立ち替わり、走り回る。人形のまわりに煙が立ち上り、時折、人々の肩の隙間から炎が見える。人形を火あぶりにするのだ。次第に炎が大きくなり、それにつれて、馬と人々とが、激しく走り回る。突然、仕掛けられた花火が、爆発し、人形の一部が吹き飛ぶ。炎が人形を包んで黒い煙となったときに、人形は、木端微塵に吹き飛んだ。

人々は喚声とともに手をたたき、今年は、うまく花火が爆発した。今年はこれで良い年になると口々にいう。

初夏の新緑がアルプスの山並みを柔らかくおおい始めるころ Kanton Glarus (グラルス州) では州議会 Gemeinde の総会が開かれる。

スイスの直接民主主義といえども、チューリヒやその他の都市部ではほとんど代議員制に移行し、重要議決事項のみを全有権者で賛否を問うことになる。

1973年の5月12日のグラルス議会では、信じられないことではあるが、初めて婦人に参政権が与えられての第一回であるという新聞記事にもつられて、私と妻君は出かけて行った。婦人参政権は都市部においてさえかなり最近になって認められたにすぎないということで、スイスの保守的国民性を示すものであるようだ。

街に近づくにつれて〈Gemeinde〉という看板が目につくところに立てられ、人々は着飾り、子供たちははしゃぎながら広場の方向へ集まってくる。駐車場も十分に用意され、赤いVWも何の違和感なしに、つまりスイス国民に迎え入れられている。

広場には人々が溢れ、州の旗やスイス国旗が周囲の建物をおおい、その背後にはアルプスの厳しい岩塊が透明な大気の中を真青な空へ突き抜けている。壇上には古来の衣装やかつらをつけた代表者や長老が立ち、私たちには理解しづらい現地語で論説し、次々に表決を行っていた。それはお祭りである。少なくとも私の目にはそう映った。広場に通じるメインストリートには出店が並びソーセージ焼や風船、民芸品等が全く夏の日本の夜店の如きである。

広場では延々と表決議事が進んでいる。確か町はずれに何かの施設を作るかどうかで演説が行われていた。

婦人参政権が実施され、実はこの広場の収容規模では小さすぎるのではないかという心配を2人の友人から聞いた。そうすれば、この直接議会もそのうちに代表制議会へ移行していくのかもしれないと思うと、非常に大切な歴史の場面を目撃しているのではないかと緊張してみていた。広場を離れ、車に乗り、中心部を少し離れると、そこは明らかな空気の中での美しい郊外であった。庭園国家といわれるスイスの最も古い部分でのお祭りもまた、スイスでも普通の場面にすぎないようであった。

ZURICH 留学記(7)

□パリでは

1973年3月10日、私はParisのオルリー空港で8時間も待ち続けることとなった。

前日は、チューリヒから、オーストラリア人の留学生のデーヴィド君を乗せていつもの赤いVWで約9時間かかって、もう何度目かのパリへやってきた。そして京大の1年後輩の中村貴志君に頼んで、彼の部屋に泊めてもらった。彼は大学都市の日本館に滞在していて、その日は彼が誰かのアパートへ移ってくれていた。

翌朝、私が日本館を出ようとする管理人に見とがめられて、寮生以外の者の宿泊は有料で10フラン取られてしまった。タダで泊るつもりが失敗であった。日本館は、パリへ留学してくる日本人学生にとって必ずと言ってよい程にお世話になる場所である。最近、ようやく改装の資金が集まって少しはきれいになったはずである。

私と同時期にパリに来ていた吉田鋼市(歴史研=現横浜国立大)も1年間、ここにいた。

コルビジェのスイス学生館も実はこの「大学都市」内にあり、日本館の2・3軒隣に見られる。平坦なファサードの宿泊棟と、管理・公共部分の低層部との対比に近代建築の粋がある。

私が最初にみたヨーロッパの近代建築は、実はこのスイス学生館であり、それもわざわざ見に来たのではなく、日本館へやってきた時に隅々目にしただけのことであった。

私の留学期間中を通じて、わざわざ何か建物を見に行くということをあまり考えなかった。が、本当のところ、近代建築そのものへの興味が薄かったことも事実である。

帰国後、人によく言われるのであるが、もっと食欲に見るべきだったのかもしれない。

この大学都市の中にはもう1つ、コルビジェのブラジル学生館もある。が、作品としてはもう1つであると聞いていたので見なかった。

大学都市は、パリの郊外にある。

カルチェ・ラタンと呼ばれるソルボンヌがある、学生街の端、ルクサンブール公園のところにある駅から学生たちがRERと呼ぶ電車に乗って郊外へ向かって3つ目の駅前に広い敷地を占めてある。各国からの留学生を対象にして数多くの建物が建てられていて、学生食堂が中央に大きいのがある。当時1食が1.75フラン(部外者は2.2フラン)であった。

大学都市の中には銀行もポストもあり、異質な都市空間であった。研究室の加藤助教授はボザール留学時にスイス学生会館に住んだというし、先輩の杉本安弘氏はドイツ館に住んでいた。

□パリ・オルリー空港

私は、赤いVW1300で空港へ行き、パーキングにとめて、10時着の日航機を待った。

そのころはドゴール空港が工事中であり、JALはオルリーに着く。その年の6月に、私たちの結婚式のために来欧した母親たち2人の時には、新しいドゴール空港の到着ロビーへエスカレーターを昇ってきたのを出迎えた。

その日は、同じJALを待つ人々がかなり居るようであったが、どうも到着が遅れるという話が伝わってきて、ヤレヤレと思った。飛行機便はよく遅れる。しかし遅れることを予想して遅刻するわけにはいかない。

アラスカのアンカレッジで故障のために整備をして遅れるらしい。待たざるを得ないだろう。が、なかなか到着予定時刻が発表されないのでその場を離れてパチンコでもというわけにもいかない。

何人かの日本人待ち客と雑談したりしながら1時間・2時間経っても予定が分からない。どうやら、オランダのアムステルダムまでは来たらしいが、飛行機がどうにも動かなくなって、別便に振り替えられるという話が伝わってきた。アムステルダムからパリまで列車で2時間である。空港のレストランで食事をしたりして、ジリジリ待つこと8時間目に、JALのジャンボ便は到着した。

待つ方もやってくる方もクタクタである。私の妻となるべき女性はクタクタ・フラフラになってゲートを出てきた。私も空腹で声も出ない。ドラマチックな抱擁は実現できなかった。

8時間分の駐車料金に腹が立ったけれど、彼女を乗せて市内へ走った。

ホテルは彼女が日本から手配していた。もちろん星1つのホテルであったし、シングルルームを2部屋予約していた。そうです。私たちはまだ結婚したわけではないのです。そのような当り前のことに私は感動するのであった。

□ベルンの大使館

日本人が外国で婚姻届を出すところはその国の大使館である。戸籍謄本を持って二人で行けばよい。私たちは、チューリヒから車で1時間の首都ベルンの大使館へ行ったのは3月21日であった。それは平日であったのに、大使館は閉まっていた。理由が

分からない。大使館は大使公邸と隣接していて、とにかく、ベルを押した。

ベルンの大使館は、何かとお世話になっていて、館員の人たちも顔なじみになっていたので、何とかなるだろうと思った。すると大使本人が出て来られた。その日は日本では春分の日で、大使館は休日ということだった。婚姻届を出しにきた私たちに井川大使は、折角のめでたい事だからといって書記官の自宅へ電話をしてくれて手続きを済ませることができた。

チューリヒの領事館や、ベルンの大使館の人々と仲良しになっていたということは、何かにつけて、安心であった。パリの日本大使館は不親切の悪評が高かったが、スイスという小国に滞在している日本人の数も一応は覚えられる範囲ということで、とにかく、小さな日本人社会はうまく機能しているようであった。

ZURICH 留学記(8)

□マルアーニ建築事務所

さて、新婚旅行はモロッコに行くことになっていた。結婚の話がもちあがる以前の年の暮れに、友人の石井君と、寒い夜、「カサブランカ」の古い映画を見た。春の学期休みの旅行をどこにするか思案していた時に新聞広告をみて、モロッコを候補にあげていたこともあり見に行った。ボギーが霧のカサブランカ空港に一人残るあのシーンで私たちの計画は確定した、その後に結婚話が起り、男同士の友情の板挟みに悩んだ結果、コブ付き三人組の新婚モロッコ旅行ということになった。寝袋や炊事道具一式、それにインスタントラーメンを買いこんで、チューリヒを出発した。

最初の目的地は、イタリアのリベエラ地方のサボナである。増研の先輩の中嶋私郎氏が、ローマ大学教授マルアーニの事務所で働いていて、私は事あるごとにサボナへ行っていた。ちょうど一日の行程である。現金沢工大助教授の田中光氏も三年間、マルアーニの事務所にいた。今でもマルアーニ教授から私の手元に、毎年楽しいクリスマスカードが送られてくる。

MANZONI 通りの事務所で中嶋氏に会い、彼がお祝いに、レストランへ連れて行ってくれた。彼はカッコ良くイタリア語で注文し、私たちは幸せいっぱいにおいしいピザやラビオニを食らった。その後、店をかえてコーヒーを飲んだ。地元の人に案内してもらうということは実に素晴らしい。その夜は彼のアパートに泊まった。1 室+バスルームのそのアパートで、私がどのように寝ようかと話し合った。新婚旅行初夜のカップルを含めて、男子 3 人、女子 1 人への

対応は結局、女 1 人を玄関に寝かせて、男子 3 人は 1 室に寝ることで話がついた。私がドアのところに陣取って用心棒の役目をする。寝袋はこういうときのためである。彼女は、中嶋氏のバスローブがとてもよかったので、彼のセンスへの評価点は高くなった。

□エクス・オン・プロヴァンス

サボナからサン・レモまで約 1 時間である。途中、「太陽がいっぱい」の舞台、エゼの町もある。そしてカンヌも隣接している。昨年にはモナコグランプリの F1 レースも見学に来たことがある。モナコも走りすぎ、フランス国内へ入る。そして、マルセイユを迂回するバイパスを走っている時に気がついた。

セザンヌ…。私は修士論文で少し引用したのであるが、セザンヌがその仕事場とした村、エスク・オン・プロヴァンスを通り過ぎてしまった。周知の通り、セザンヌは近代絵画の父と呼ばれる。パリの中央画壇に久しく無視された。セザンヌは、印象派の画家といわれるが、実は次の時代、立体派と、抽象派への契機となる画家である。宙に浮いた皿、違った角度で見える花瓶、ズレた机の角等の表現は、キュビズムの萌芽を見せる。一筆毎の積み重ね、小片の積み重ねによる画面の構成部分では決して具象でないその絵画は、抽象への連続をみせる。彼はパリを遠く離れ、プロヴァンスに住みつき、サン・ヴトワール山を描き続けた。私にとってその風景は、私の精神風景の原点でもあるはずである。

私は思い迷った。エクス・オン・プロヴァンスは通り過ぎてしまった。というよう、

何気なく地図を見て見つけた地名がそれであり、気がついたときには通り過ぎていたのである。同行の石井君は化学者であり、いつも私の建築家的旅行には付き合ってくれてはいるけれど、何も無い、山があるだけの画家の故郷を見るために引き返す程には、時間の余裕がなかった。

私はその地を訪れることを断念した。

□カルカッソン

かなり走り続けたその日の夕方、暗くなりかけていたことにカルカッソンに近づいた。少し高台に素晴らしいシルエットを形成するゴシックの城郭都市の遠景が見えてきた時、私は、1年前にこの地を訪れた時を思い出した。

夕方に列車が着いたこの街にホテルを決め城内を見て回った後に、スーパーマーケットでパンとヨーグルトを買い、朝食に備えた。ヨーグルトにはスプーンが必要である。そのスプーンがなかなか見つからない。フランス語が専門でない私にとって、店の人に聞いても、私の英語は理解されない。よく似たサラダ用の大きなスプーンを見せて、この小さいものと説明してもだめ。結局は、そのサラダ用の大きなスプーンとフォークを買うしかなかった。ホテルでの寂しい朝食、あのヨーグルトの酸っぱかったこと。後でわかったことは、それは何も混じっていないただのヨーグルトであって、それだけでは食べづらい代物であるらしい。とにかく、無知ゆえのしくじりを重ねているうちに1年半経ってこの街に再びやってきた私は、一応はヨーロッパの生活もわかり、自信のようなものができていた。

今回は、城塞都市の平地部を通り過ぎてしまった。建築家の私は、1年前に自分だ

け見学していたので、もう見に上がって行くつもりがなかった。しかし、これは永年に渡って妻の不満がくすぶる原因となった。3年間パリにいて、ヨーロッパ中を旅行してしまっていた彼女は、カルカッソを訪れていなかったのである。只1つ、訪問していないカルカッソに、いつか連れていくように事ある毎に口に出すのである。

ZURICH 留学記(9)

□スペインのオスタル

ガイドブックによると、スペインには公的に登録されたホテル、というか民宿のようなものがある。

カルカッツを通り過ぎて、バスク地方を横断すべく、ピレネー山脈横断のルートを選んだ。しかし、山路は思いの外時間がかかり、明るいうちにスペイン側の町には到達できそうになかった。

山の中の村に、オスタルが見つかったので泊まることにした。思い出すに、私たちは新婚旅行中であり、友人のカンタロー君は二人のボディガードという組み合わせである。旅行の1泊目は先輩の中嶋氏のアパートで雑魚寝だったので、このピレネー山脈の村のオスタルでは、最初の夜であるはずだった。

2室部屋を取って、3人で相談して、結局妻が1人で寝て、男2人がツインの部屋ということにした。我々には照れがあった。家庭的な食事と、清潔な部屋には、非常に満足できた。

朝食をとり、支払いを済ませて出かけようとする、宿の女主人が大声で叫び始め、まだ部屋にいた妻を閉じ込めて、監禁したのだ。

女主人はスペイン語でまくしたて、何を問題にしているのか分からない。少しはスペイン語が分かる妻は部屋の中に閉じ込められ、話もできないし、泣いている。

先に外に出ていたカンタロー君も戻ってきて、「どうしたのー」と言ったきり、女主人の叫び声と、妻の泣き声で膠着状態であった。

そのうち、やっと男の人がやってきて、女主人の話聞き、とにかく部屋の鍵を開けて、妻は救出された。どうも、我々が何か宿の備品のタオルか何かを持ち出して、つまり盗んだと騒いだようだった。

正確な話はわからないまま、我々は逃げなくてもいいのに逃げるように宿を後にし、ピレネー山脈を下って行った

留学中、正確にはわからなくても、わからないまま済ましてしまうことが実に多かった。

ZURICH 留学記(10)

聖地巡礼 ルルド

□偉大な旅行者たち

私たちの旅行は、大まかなルートを地図で決めるだけで出発してしまう、そしてどこかの街に着いてからホテルで、モーテルで、またはユースホステルで次の日の予定を作る。石井カンタロー君は私にとっていいパートナーである。私は好きなことを思いつくままに口に出し、彼は、「そうかなあ」ということもあるし、「陽ちゃん建築家なんだから、こういうことは、ボクよりも良く知っているし、任せるよ」といったりしながら、あまり口論になることはない。彼は慶応出身の化学者である。祖父様は大正製薬の創始者であって、彼の父親は ETH チューリヒ工科大学でドクターを取り、現在、明治薬大の理事長である。彼と私との独語の能力もほぼ同等であって、英語力も同等である（但し、彼はもしかして、自分の方がうまいと考えているかも知れないが一）。

それに今回は私の新妻が加わり、仏語のバックアップを受けて、私たち3人組は、世界に通じる強力な旅行家グループとなった。しかし、独仏英語 OK の旅行家もピレネー山脈の山の中ではすっかり力を失っていた。

スペインは、私の妻はすでに3回旅行しているのです、今回はなだめかすかして、案内係に徹してもらおう。但し、彼女の行き残した所を必ずまわることを約束させられたうえでのことである。彼女はカトリックの信者である。彼女たちは巡礼路や、聖地聖跡について私たち俗世界人には想像を超える執着心をもっている。そしてそのなかでも信じて疑わない霊験あらたかな御利益に、

「ルルドのお水」というのがある。これを飲めば幸運が巡り来るし、病気も治るといふ。もちろん、何年おいておいても腐らないので宝物としても珍重されている。私はしかし最大の「信者さんの擁護者」であるために、快く同意し、カンタロー君も「面白いやんか」と、東京高田馬場の人間のくせに、神戸弁が伝染してしまっただけで返事をする。

□民俗学的好奇心

私の所属する京大の増田研究所には、いつも留学生たちが出入りしている。そして彼らが興味を持つことは、日本の現代建築家たちであると同時に、伝統的な建物、木割法、作庭法等であり、更に進んで民俗学的事柄である。彼らは進んでお祭りを見聞し、冠婚葬祭に参加する。珍しいことを知ることには誰にでも必要なことであり、それはむしろ現代社会の底辺を形作っている土俗的習性を知ることにもつながる。建築家は、民俗学に興味を持つことで自らの立脚点を確保できる。増田友也教授の博士論文は、オーストラリア原住民の住居の原始的空間構造についてであったし、私たちの修士論文のためのゼミナールでは、レヴィ・ストロースの構造主義的民俗学の名を外しては、それこそ「間抜け」の「空間」を論じているようなものであった。

私の知人の Manfred Speidel は現在、Aachen 工科大学の教授となって日本を離れたが、彼は日本の巡礼路について実によく研究している。いろいろな雑誌で発表されているのを読んでも、日本人が知らないことをよく知っている。掘り出しているという方が正しいのかも知れない。古文書も読

める。

留学生 Siegfried Endels（現在 Darmstadt 市勤務）と、M. Speidel を二人でわがアパートに招待したときも、私たち夫妻は「日本のこと」を教えてもらいっぱなしであった。

MIT の客員教授をしているという Gunfer Nifke も、アメリカと日本と、インドとを毎年行ったり来たりしている。民俗学に埋没し始めると、現代建築を軽蔑し始めるということもあり得るようだ。

私は「建てる」ことに興味を持っているので、民俗学には「適度な範囲内で」興味をもつことにとどめようと考えている。

ZURICH 留学記(11)

□アルタミラの洞窟壁画

ピレネーを下りて最初の街は Pamplona である。ここは確か、街中を牛が走りまわって大騒ぎすることで有名な街であるように記憶している。

なだらかな丘陵地の斜面にそれはある。もちろん遠目には、それらしい気色は全くないのにその地下に、かつての文明が残されている。

ローマ郊外のカルタコンベ（地下教会）の場合もそうである。南国のあくまで明るく、射るような日差しの下で、地下深く洞窟が掘りめぐらされ、人骨が散らばった棚段が薄暗く照らされている天と地との異次元、否、異時限の空間であった。

アルタミラもまた、春の陽光のなかでのどかに静かであった。その恵まれた土地に原始の人々は生活をしていたのであった、と思ったのも故郷を 2 年近く離れて旅をし、その旅先で人類の祖先の住む「故郷」に着いたからではなからうか。

洞窟の中には、かなりはっきりと名高い壁画が見て取れた。見物人は日本人だけではない。現地の人々もかなり居る。当たり前のことではあるが、例えば、スペイン人が、今頃このようなところへ見学に来るのが不思議に思えたりもする。

南西フランスのラスコーに残る壁画もまた、このアルタミラと並び称せられるのであるが最近是一般公開をしていないと聞く。アルタミラもその内にその門を閉ざされていくことだろう。帰国後に、海外ニュースで、この洞窟での二酸化炭素濃度や何かを測定し、しだいに破損の危険を報じているのを見た。自分は、見て来た後なので

一安心である。そういうときは、急に学者ぶって、そう、一般公開を控えるべきだなんてつぶやいたりもする。

□ブルゴス—水と街

今度は、Madrid へ南下する路をとる。途中、Burgos の街に立ち寄る。街に特別な意味もなく、立ち寄る場合はたいていは、郵便局で手紙を出すか、銀行でお金を交換するためである。

街の中心を流れる川のほとりに郵便局があり、書きためた絵葉書に切手を張って投函する。この川の郵便局の反対側に、フランス様式のゴシック聖堂がある。

スペインといえどもこの街は清潔で流れている川も緩やかで、水と緑のゾーンを形成していて街として安らぎを持っている。

大体において街には川がつきものである。それも急流であってはならない。緩やかで船でも通れるぐらいの落ち着いたものであるべきである。パリのセーヌ川が、水しぶきをあげて流れていては、あのシャンソンはできないであろう。アポリネールの詩集「アルコール」にある「ミラヴォー橋の下、セーヌは流れる」という情感はゆっくり遡ってゆく、底の浅い機帆船なしには、理解できないであろう。

ロンドンのテムズ川もまた、ロンドン橋や議事堂を映してこそ霧の中に霞む風景の伏線になる。ライン川沿いのバーゼル、ケルン、ドナウ川沿いのウィーン、ブダペスト、ソフィア、ストラズブルグもまた川を持つ街である。わがチューリヒは、川と湖を持ち、それはまたジュネーヴやローザンヌ、ルツェルン等にも共通する。緩やか流れは水運を可能とし、街の発展を約束すると

同時に、人々をして、心安らかにする。川は、密度の高い都市空間に、ぽっかりとしたオープンな空を与える。そこに新鮮な空気と涼しさがある。京都に鴨川がなくてはとてもあの蒸し暑い夏を耐え抜けるとは思えない。大阪の淀川、中之島付近の空間が必要なことも同様である。江戸にもいくつかの川がある。都市には概して地形的なアイデンティティが乏しい。川は、都市のなかで自らの居場所の座標を識別する軸となり得るし、それが、都市の居心地の良さに影響を与える。

ゆるやかな流れを持つこのブルゴスの街を見て、私は、しばらくは住めそうだと思う。少なくとも、川のほとりのカフェテラスの水の流れを見ているだけで十分に時間をやり過ごすことができると思う。

ZURICH 留学記(12)

モロッコへ

□イベリア半島から

ピレネー山脈を越えて、スペインの北部へ入り、南へ下って、マドリッドに着く。さらに、西へ走り、ポルトガルをまわって再びスペイン南部の海岸に出る。

モロッコへ行くのに、それまでに時間がかかっているが、また機会があれば書いてみたいとも考えている。

モロッコはフェリーで渡ることができる。イベリア半島の南端は、ジブラルタルであり、そのあたりからフェリーが出る。

ところが、このあたりは、少々、複雑な歴史と国際関係が絡んでいる。ジブラルタルの突端は、実は大きな岩山がそそり立っていて、そこは、イギリス領なのである。

イギリス軍が駐在していて、それが原因で今でもスペインとイギリスはすっきりいえない部分がある。スペイン本国と、その英領ジブラルタルとの間の国境は閉ざされていて、出入りができない。

1981年に、英国皇太子の結婚式にもスペイン国王は招待されなかった程に、しこりがあるそうだが、その封鎖も最近になって緩和の方針が出たのを新聞でみた。シンガポールや香港の99年間無償借款という歴史的知識と同様に、大学受験的世界史がただ今にも存在している。

対岸のアフリカ側の港町セウタは、逆にスペイン国内である。それでスペイン本土側の港アルヘシラスからのフェリーはセウタ行と、まさしくモロッコの街、タンジール行との2本がある。

私たちはセウタ行を選んだ。アフリカに意地でもしがみついて、しかも地中海の入

口を抑えているつもりでいる飛び地の港町を見る方がはるかに面白い。しかも、海外を旅行していると「国境を越えること」は、いつも緊張を覚えるものであるから、明確に「国境」を越える方が楽しい。

フェリーで国境を越えるときは、その出入港時のターミナルで、手続きが行われる。そして、その洋上は、あくまで、国際海洋上であって、アルコール等は無税扱いを受ける。

ただ相手がややこしいモロッコという国であるために、何かの拍子に、入国をストップされて時間を食ったり、フェリーの中で宙ぶらりんになるという事態をおそれたことも、セウタ行を選んだ理由になる。

アルヘシラスには、夕方到着し、港へ行って、フェリーの時刻表を調べる。明朝発を確かめてあらためてホテルを探す。いつもどおり、一番安そうなホテルを見付けるまで走る。

このような街では、安ホテルというのは民宿である。インターナショナルなホテルは、世界中のどこでも同じであって、年をとればいやでも泊まることとなる^(註)。少し高台にある、石灰水を白く塗りつけた、一般の家と同じ建物のホテルに決めた。

「建物」と書いたが、本当は「建物」というイメージではない。どうも「たてもの」とは、「柱をたてながら建てていく建物」という語感がある。そして、ヨコに寝ているよりも「タテに建っている」ものを指すような気がする。

地中海沿岸の白い家々や、乾燥地帯の日干しレンガの家々は、どうも「建物」と呼びにくい。「家々」ではない、「建物」でもないものをどう呼ぶべきであろうか。

「Architecture without Architect」に紹介されている「Architecture」をどう訳せばよいのだろう。

とにかく、そのホテルは普通の家のようにあって、私たちは、階上の、いわば屋上テラスに作られた部屋に案内された。明るい日差しが照りつけるテラスからは港が見える。素朴ではあるが、白く、乾燥した部屋は清潔であった。

(注) (後年、旅行はしたが、立派なインターナショナルホテルに泊まる機会は、あまりなかった。)

□モロッコ国境

翌朝、フェリーに乗り込む。アフリカ大陸側の入港先セウタもスペインであるから、乗船切符だけの手続きである。セウタへの入港も問題なく、とにかく、高台まで登りつめて街を見下ろす。

私は神戸生まれであって、港や船には特に愛着をもつ。神戸は、南に向かって開いた港である。高台からみると、海はキラキラと光り、その反射を受けて港町は明るいものであると思っている。ところが、北に向かっての港町は暗い。港へ下りて行く斜面は北斜面で建物はすべて影の部分に港に向けている。海も暗い。南国スペインから地中海を渡って着いたアフリカの港町は、寒々と感じられた。

この、寒々と暗い港町から、太陽を目いっぱい浴びているスペインやフランスやイタリアの緑の大地が直接見えるはずはないけれど、アフリカ大陸の北端アルジェリアやモロッコ、チュニジアの人々が、ヨーロッパに夢を求めて渡っていきたいと思う感情が理解できる。

街中を一巡して、いよいよモロッコ国境へ向かう。少し郊外まで行かなくてはならない。私たちと同じフェリーで渡ったと見られる、現地の人々の徒歩の列が街から延々と続いている。その列をずっと追い越して検問所付近に近づくと、車も長い列を作って並んで止まっている。

ZURICH 留学記(13)

とにかく、車が動き出しときは日が傾いていた。モロッコは、ヨーロッパ本土とは異なり、何が起るかわからないおそろしいところであると、仲間内では覚悟の旅行である。ハシシが平気で売られ、物は盗られ、車は狙われる。男はゲリラ要員のためにさらわれ、女は売り飛ばされる。そんなことを驚かされていて、それでも勇気を出してやってきたのに、その入口で長い足止めを食って、第一歩はツイていない。

しかし、ツイてないことが永遠に続くわけではなく、いつか、順番が着て無事、手続きを終え、モロッコに入った。国境からの道も、現地の人々の列が再び続いている。土色の縦縞模様のガウンのような服を着た人々は、それぞれに大きな荷物を持って黙々と歩いている。夕暮れが近づき、私たちはその最初の街で泊ることにした。少しでも早い目に、余裕を持ってホテルを探さなくてはならない。街の入り口には、少年たちが立っている。私たちの車を見ると走り寄ってくる。ぶつかってくるようにフロントガラスに顔を持ってきて叫ぶ。「ハシシ」。

さっそくハシシの出迎えである。私は遂に試すことはなかったが大麻の一種である。私たちは逃げて街の中に入った。街の中央にはロータリーがあって、そこから放射状に道路が出ている。手前の路から順に走りながら、ホテルを探す。中央のロータリーから離れると不気味になる。夕暮れの街に男たちが出てきて私たちの車を目で追う。路を縫うように走り、そして、再びロータリーに出る度に、先程の少年たちが叫びながらやってくる。

2、3軒ホテルを当たってみたが、どれも無気味であった。できるだけ表通りの方がよかろうということになり、ロータリーに近いホテルに、わが妻をガードしながら、入って行く。カウンターは、バーのカウンターと続いており、暗い影のような男たちが、話声を止める。車をホテルの横に停めておこうとすると、ガレージに入れろという。私たちは、自分たちの部屋から常に確認していたかったのに、ホテルの人がそういうのでヘタに逆らうのも恐いし、言われるままに置きに行った。そして、念のため、これは私たちの経験上の知恵であって、ボンネットを開けて、エンジンの接続コードの1つを抜いておく。そのコードを見付からないようにポケットに入れながらそのガレージを振り返ると、それはまさしく修理工場であった。その時程に、世界で最もポピュラーな車、フォルクス・ワーゲンに乗っていることを後悔したことはない。例えモロッコの、この小さな街の修理工場であったとしても、私たちの赤いVWの接続コードの部品くらいはありそうだ。車泥棒が「飛んで火に入る赤いVW」と喜んでるようでゾットした。

□羊飼

翌朝、朝食もそこそこに大急ぎでガレージに行くと、そのままに車がなかった。盗まれるのと、あるのとでは、天と地の差であろう。例のコードをしっかりと差し込んでエンジンをかけると、元気にスタートした。荷物を積み込み、不安な夜と、ハシシの叫び声の街を逃げるように走り出した。

道路は一応アスファルト舗装で整備されていた。走る車も少なく快適である。ラバトへ向かって南下するのだが、一度、アフ

リカの西海岸沿いに南へ走る。沿道の村は粗末な板囲いだけの集落で、日本の農村の「たまねぎ小屋」のようなものである。羊が放牧されてあって、道にまで遊びに出ていたりもする。かなり重たい雲が空を覆っている海沿いを、ぽつんと一つの影が立ち、私たちの赤いVWは、それを通り過ぎたのであるが、それは羊たちを追う、老羊飼いであった。

西洋において、「羊飼い」とはやはり感傷的なイメージが漂う。西アジア、ヨルダンの荒地、死海…ユダヤの民や原始キリスト教を思う。「羊飼い」をみると、聖なる人、仙人に会ったような気になる。それにもまして、絵になる。通り過ぎる時に、見た場面が脳裏に焼きつき、車をとめ、そしてバックをして、その老人のところまで戻る。

ぶしつけにカメラを取り出す。私の妻も車を降り、恐る恐る近づく。危険のない距離まで近づいて、カメラにおさめる。大きな空と海を背景とする老羊飼いは、私の持っていた記憶揺り動かしてくれた。不気味ではあるが哲学的、思索的な風貌であった。

ZURICH 留学記(14)

□ラバトのはっか茶

羊飼いのおじさんに大いに感動したあと、なおも海岸沿いの国道を南下する。モロッコの首都ラバト **Rabat** に着く。

アラブ圏の中でヨーロッパ諸国から親近感があるのはモロッコである。フランスの植民地から独立したのではあるが、その割には反仏感情がないそうである。大体、フランスという国は外交がうまいのか、それとも文化的優位性が世界中に信認されているのか、その理由は分からないが、どんな暴れん坊の独裁者たちも、フランスとフランス文化を敵にまわしてしまわない。中国やリビアやイラン等、独特なくせのある国にもフランスに外交ルートは確保し続けている。

モロッコのハッサン国王ももちろんフランスへの留学経験がある。彼は自ら戦闘機の操縦桿を握り、アラブ諸国やヨーロッパを飛び回っている。私の滞欧中、OPECの会議からの帰途、自国の反乱分子の戦闘機から銃撃を受け危うく遭難しかけた。そういう国王だから、民衆の間ではかなり人気がある。

ラバトに着いたのは、昼前であった。王城の壁の外周道路沿いのレストランに入った。こういうところではシシカバブーを注文するのが礼儀である。羊肉の串焼きである。赤いVWは目の前に停めているので安心しながらの食事である。もちろん客たちは現地人である。メニューはアラビア語と、フランス語で記されているので我々には支障がない。この大衆食堂では、男たちが大声で議論をしたり、隅からこちらをじっと伺っていたりする。私たちは彼らの目にお

かれているガラスコップに気がついた。緑の葉っぱを浮かしたお湯のようだ。私の妻は、はっか茶であるという。

はっかは、小さい頃、夜店の光の下に並べられた笛のような吸い口のあるプラクティックのおもちゃに入っている「はっか」を思い出す。フケツ・フケツと言われて手にしたことのないあのはっかは、しかしいつの間にか私の舌の記憶につながっているので、どこかで隠れてなめたことがあるらしい。子供のころの記憶では、はっかは「粉」であった。

そんなことを考えていて、私はその「緑の葉っぱ湯」を注文したくなった。友人のカントロー君は、私の幼年時代の甘い誘いには乗らなかった。彼には一口くらいは分けてあげても良いと思った。はっか茶が運ばれてくると、まわりの男たちの視線が私に集中した。しげしげ私はその液体をながめて、一口飲んだ。飲める代物ではなかった。臭いと良い味と良い、まさに雑木林の木の子からはらりと落ちてくる葉っぱ以外の何物でもないものであった。飲み干すことおろか、次の一口を試す勇氣はもうなくなってしまった。

イスラム教徒は酒を禁じられている。それに男女関係も、強い男が優位で、普通の男にとってはかなり不利であるらしい。はっか茶は精力減退作用がある。酒と女とに欠乏している普通の男の世界では、「はっか茶」がなくてはならない飲み物なのかもしれない。

隣の私の新妻は複雑な表情である。

一方私は、私個人の問題では済まされない国際関係のしがらみの中にいた。ラバトの男たちからみた私たちは、ポピュラーな

人種ではないはずである。日本人と特定はできないだろうが、東洋人が、彼らの好みの飲み物を一口なめただけで止めたとなると、私刑にでもあいかねない、等と妄想してしまう。

私の思い悩みに、妻や友人は冷淡であった。

こういう時になると私は「男の意地」を証明したくなる。つまり無茶苦茶になって「葉っぱ茶」を飲み続けた。が、半分までくるといよいよ葉っぱが露出してきて、直接唇に触れるようになって、断念した。まわりの男たちは一応納得して自分たちの話の続きを始め、私の仲間たちはさっさと席をたって車へ歩いて行った。

□カサブランカー1人ぼっちの夕食

ラバトを発つと、次はカサブランカである。街は大きく、西欧的な部分と旧王城の部分とがやはり別れていた。ここではスクスクを注文した。妻がパリ留学時代に教えてもらったといい、やはりアラブ地方独特の食べ物である。いくなればアラブ風お好み焼きである。私には日本風ソースのお好み焼きの方が口に合う。

そのレストランには、私たちの他に一人だけ客がいた。どうやら日本人らしい。

終始無言で薄暗いそのレストランの中でその男性は、格別まずそうな表情でもなく、かといってそれほど高価でもなさそうな夕食を取っていた。いつの日が私自身もそういう姿を同国人の若者たちに見られるであろうことが想像された。

ZURICH 留学記(15)

銀のティーポット

カサブランカを朝発つ。海岸沿いに出ると背後にカサブランカの市街がみえる。海はどす黒く、同じ色の雲がすぐ頭の上にせまる。カサブランカでは恐ろしい目にあわなかったが故に、大した収穫もなかった。映画「カサブランカ」のような霧の飛行機も体験できなかった。しかし、この空の黒さはどうだ。スペインの画家ゴヤに画かれる不安や恐怖の空の色に同じだ。大西洋を南大陸から打ち寄せる波が白い泡をかき立て、砂浜さえ黒く染まりそうだ。

この空に向かって、双発のプロペラ機は舞い上がっていくのを、イヴ・モンタンが見送ったのだ。

海岸沿いに走ると EL JADIA の街が見えてくる。土色の川を、渡る橋の上から眺める。建物は土色をしていて、地面か川か建物かの区別がつかない。が、それは構造物として充分に迫力がある。河岸の崖から建物へ直接立ち上がっている。アシジの山の中腹から擁壁のまま立ち上がっていて、美しく計画されて出来上がったサン・フランチェスコ教会に比較できる。崖の上に、崖と同じ岩石で積み上げられた建物群は美しくさえあった。

橋を渡って街の中に入ると、以外にも建物は平らでだだっ広かった。砂埃をあげてトラックが走りまわり、どこかの国の職業安定所の如き、男たちが群がり漂っている。朝の仕事はじめの頃の若干物憂げで力の入らない時間に私たちは街へ入り込んだのであった。しかしそれは旧市街メディナの外側であった。城門を見つけて私たちは、車を走らせると広場があり、車が止められる。

そしてそこには、革製品、銅製品等の露店が開かれていた。女性である私の妻は、まず目を輝かせるのであるが、案内板に従い港へ歩きだす。広場からメディナの路地へ入り込み、それは決して不潔ではない乾いた砂地の石壁の挟まれた石畳を歩く。ほんの2~3人の現地の人々とすれ違っただけで、路地は急に海に見えるテラスに出た。この港は、かつてポルトガル海軍の軍港として建設され、西アフリカ植民地活動の拠点となっていた。ポルトガル本国の衰退とともに、撤退を余儀なくされ破壊したものを、モロッコ政府が修復したと説明されている。

港の素晴らしいものは、アドリア海のドゥブロブニクである。青い空にそそり立つ防波堤、城塞、そして鏡のように静かな湾内に浮かぶ美しい船。港はいい。このエル・ジャディア港は、規模は大きくないが、やはり遠くの地への希望と遠い歴史の舞台へと私たちを導いてくれる。

広場へ戻って、露店を見て回る。わが妻は、俄然張り切り出す。1つ気に入ったティーポットを取り出し、店番の若い男と値の交渉を始める。二人のボディガードがいるので、かなり強気である。もちろん、値切り係は彼女と、いつも決めているので、ボディガードたちも気楽である。しかし今回は非常に難しい問題が持ち上がった。妻君はそのティーポットを持ってきて、「ホンモノの銀かしら」と問いかける。私などはホンモノの銀のティーポットというものをつぶさに見たことがないので、甚だ自身がなく弱気である。銀色をしているようだが中身まで本物がわかるはずがない。幸い、同行の石井君は慶応出身の化学者である。

彼の言葉を信じることにして、意見を聞く。彼の表情に当惑の色が見えた。が、ティーポットを手に持って重さを感じて「ホンモノに間違いない」と言い切った。妻君は値切り具合に不満が残るようだが、遂にそれを買った。いまだにホンモノがどうかわからない。私たちが帰国して京都へ帰り、石井君が夏休みで京都を訪れた時に、そのティーポットの再鑑定を依頼した。やはりホンモノであるらしい。私は「ホンモノのティーポット」を買ったというよりは、友人である石井君の鑑定を買ったつもりでいる。

ZURICH 留学記(16)

マラケシの蛇使い

モロッコの魅力は、イスラム文化圏であることに加えて、小さな国であるにも関わらず、大西洋とサハラ砂漠と、雪をいただくアトラス山脈のコントラストの大きさである。

ジブラルタル海峡を渡り、ラバト、カサブランカそしてエル・ジャディアと海沿いに走り、いよいよ、内陸地へ方向転換をする。次はマラケシである。「カスバの女」等の映画や歌で心にかすかに残っているマラケシという言葉に向かって走って行く。

4月の快適な気候の中、原野に花が咲き、時折の雲が、その原野を黒く染めながら動く。アトラスの山脈の高いところに白い雲と青い岩肌とがはっきりと見分けられるようになる、マラケシに着く。

西に傾きかけた夕日が、城壁を柿色に照らしている。街は城壁と、緑のナツメヤシとで形成されている。車で一通り走り回って、城外のホテルを見つけてから、今度は歩いて中心地区へ行った。旧市街でもメインの道路は街路樹が並び充分広く、ゴミも落ちていない。砂漠の民の栄光の時代に計画されてできたことがわかる。トーキョ砂漠とは比べ物にならないほど人間的であり、都市的である。夕暮時で、人々はくつろぎの時刻であるのかゆっくりと歩いている。

ジャマア・ル・フナ広場では、モロッコで最大のお祭りが毎晩開かれているとガイドブック・ミシェランにある。群衆と、音に満たされている。沈みかけている太陽で建物は照らされているが、広場は黒い鍋の底のようで、そこには本当に大勢の人々が

いた。舞踏団、笛吹き、蛇使い、曲芸師等を囲んで人々は集まっている。頭と頭の間から覗いても良く見えないし、彼らの中をかきわけて前へ出るのも怖い。見物料等はどうなっているのだろう。とにかく歩き回っていると、たまたま人々の輪が崩れ、直接に輪の中が見えたので前へ出てみた。蛇使いであった。カメラを向けると怖い顔でこちらにやってきて叫んだ。友人のカントロー君はきっとお金を払えというんだよと言い、彼は少しお金を出した。蛇使いの男はにっこりとして私たちにポーズを取ってくれた。カントロー君は3~4枚写真を撮ったが、私はお金を出していないので、コワゴワ1枚だけ撮った。後日、スライドを見てみると蛇は写っていなかった。蛇使いは巧みに蛇を隠したに違いない。

自転車の部品みたいなものを並べてじっとしている老人たちもたくさんいた。

4本しかない指を私たちに差し出してくる物乞いの男の子がいた。陽気なドンチャン騒ぎと、人間の貧困との同居する場所である。人口は25万人に達するという大都市である。しかしここには、水と緑と太陽とがある、何よりも貧困に裏付けられた人間がいる。

現代の日本人である私達は貧困というものに耐えられるであろうか。戦後の混乱期を知らない私たちの世代には、明日の食べ物に困る生活が想像すらできなくなっている。板子1枚の下は深淵であることに、本当は気がついてはいても…。

広場を囲んでいろいろな店が並んでいる。その前を古いアメリカ車がゴトゴト走る。地べたに並べられた自転車部品がどこかで役に立っているのかもしれないような、古

いシヴォレーであったりする。私の VW なんか立派なものである。

広場から高い塔が見えたので近寄って行くとクトゥヴヤの塔とある。12 世紀のムーア芸術の傑作であると説明されている、小さなレリーフとアーチで抑制されたいい形をしている。青い空と日干しレンガと、そしてなおも乾かしてやろうという夕陽とで、実に感動的な場面である。

広場に戻り、安全そうなレストランへ入りシシカバザーを食べる。パンとサラダとビールを注文する。これだけ毎日、肉食をしているとかなり元気になってくる。とは言っても、大抵 1 日 1 食は道端でのラーメン作りである。いずれにせよ貧乏学生の旅である。ビールが飲めるだけの余裕があれば幸せなのである。

翌朝、再び広場にやってきたが人々は少なく、シラケていた。太陽の照りつける昼間は、人々は死んだように動かないものなのかもしれない。旧城館をみて回り、美しく水をたたえた池をみると、それが権力の象徴であるように見えた。

ZURICH 留学記(最終回)

□アトラス山脈

モロッコへ来て、サハラ砂漠を走ることが夢であったが、実際はこのマラケシで引き返すことも考えていた。私の 1963 年型 VW1300 が、砂漠走行に耐えられるか不安があったからである。しかし、私たちは自分たちが思っている以上に、無鉄砲であった。アトラス山脈を見てしまうと、どうしても越えたくなくなった。しばらく平地を走ったがすぐに山道である。どんどん登ると、標高 2260m のティシカ峠に着き、ここからサハラが見える。本当にビビりながら日本を離れてヨーロッパへやってきたこの私が、何とサハラ砂漠にまで足を踏み入れようとしているのだ。

ここでは紫水晶を子供たちが売りに来る。何か良く分からないが、1 つだけ買って山を下る。マラケシから遠くみえていた雪が、道端にも残っている。この山脈が南側に乾燥したサハラ砂漠を作り、北側に水の豊富なマラケシをつくるのであろう。アトラスは、アルプス程に美しかった。3000～4000m 級の山々が続いている。山の斜面には、日干しレンガの村がある。それは、家のまわりの土を固めて積み上げているので、地面と同じ色をしている。屋根も平らで同じ色である。斜面をくりぬいている家もあるし、家畜用の囲いだけのものもある。

独語では平面図を「Grundriss」と呼ぶ。その意は「地面を切ること」である。立面図は「Aufriss」であり、いうなれば「立ち上がったものを切る」ことである。これはハイデッガーの論文にあったものか、増田友也教授の講義であったものか、定かではなくなっている。建築行為はまさしく「空

間を切り刻むこと」に他ならないとすると、アトラス山脈の集落はそれを立証してくれる。

私は学部の卒業設計では、斜面にヒューム管を並べただけのものを、琵琶湖北部のリゾート地と称して提出した。当時は大学紛争がおさまって学生たちはとにかく卒計を仕上げ、就職をしていこうという空気であった。一方では、なんとも理解し難いコンポジションだけのものもあった。活動していた学生にとっての卒計は、自らのみじめさの表現でもあった。審査会では、増田教授は欠席されていた。アホらしくて見ていられなかったはずである。他の先生方も無言であった。加藤助教授が自分の研究室の学生である私に一言だけ声をかけた。これは慣習かもしれない。「頭の中だけではね、建築は建たないよ…」

アトラス山脈の村落を、建築的に感激してみても、「お前さん、住めるか」と言われればおしまいである。「住めないようなもの」に感激してもいいのだろうか。

□ワジ (涸れ川)

水は人間の生命元である。そして川は人間の生命線である。アトラス山脈のつくり出す水の大半は西側に流れる。左側は砂漠であって、たとえ流れ落ちても消えてしまう。もちろん山脈のすぐ足元、つまりカテバ街道沿いにはまだ水があり、人々は生きていくことができる。

このようなところに好んで住んでいるのかどうかはあずかり知らないところであるが、とにかく、オアシスが点在し、ナツメヤシのまわりに村落がある。

が、見える水というものはほとんどない。

街道は時折急に川底のようなところを横切る。これがワジ（涸れ川）である。水量が多いと川になるが、大抵は涸れている。私たちの訪れた季節は、春であり、雪解け水などがあって水が多いはずであるが、大抵は涸れている。遠くに見える川面も、何やら逃げ水の蜃気楼みたいで信じられない。

ラクダを追う女の子を見かけては止まって写真を撮り、月が出て来たと思ったら写真を撮った。だんだん暗くなりかけたがどの村にもホテルがない。とにかく走るしかない。走っているうちに、暗くなったらライトがつかなくなった。故障したことのないわが VW であったが、大事なところで前を照らせなくなった。ガソリンスタンドのある村について聞いてみたが、修理不能であった。サハラ砂漠の縁の、カスバを結ぶ塗装道路には、街路灯なんてあるはずがない。その村でパンを買っていると 1 台、同じ方向へ車が来たので、黙ってその車を追いかけた。何とかそれで走れるものである。きっとその車の人は気持ち悪かったろう。

そのうち、道路の凹みでバウンドした時にライトが点いた。ヤレヤレと思ったが今度はホテルが見当たらない。8 時頃になって遠くの丘の上にホテルらしい灯りが見えたので近づくと、それがまたすごく高級そうなホテルである。様子を見るためにロビーまで入ってもじもじしていると、そこへ汚らしい西洋人の学生のように見える男女が入ってきて同じ様にフロントで尋ねていた。彼らは私たちとは反対の方向からやってきた。私たちは、これ以上進んでもホテルはないと見込んで、泊まることにした。反対方向からやってきた二人は、首を振りながら出てきて、また走って行った。私た

ちが通ってきた道を、ホテルを求めて走って行った。暗い道をどこまで走っていくのだろう。

(完)